

〔兼葭堂雜錄〕衝重といへる臺は、賀茂祭には必ず入事なるが、其製傳はらざりしを、元祿七年賀茂祭御再興の時、いろいろ々 僉儀ありて、出來たりしとぞ、通例の三方ぐりの臺の横長にして低きものなり、白く塗て摸様を画く、是をうつして、茶道に紺青を以遠山を書き、俗に遠山臺となづけ、早春の熨斗臺などに専ら用ゆ、故に有職の道に心あるものは、衝重といひて、豫て知といへども、餘人は玄らず、只遠山臺といへる物と心得たり、原來有職の方には遠山は畫かず、若松あるひは松に鶴、錦花鳥、四季の花等なり、尤衝重といふは、急の設に管の蓋を仰むけてのせ用ひしゆえに、つい重ねたるといふよりして、衝重とはいふよし、衝立の屏風なども、其時にのぞみて、つい立たるよりして號くるといへり、胡粉にて白く塗たるを、樣塗といへり、公事根源臨時客の條に、朱器様器といへる事あり、樣器といへるは、木地の器のことにして、樣塗といへるは、生地にて用ゆるを、疎き木理を隠さんために、白く塗し物にて、生地と同様なりとぞ、寸法は普く知る所なれば、是を費せず、折敷の面に冊木とちきとて、柳あるひは樺にて冊たる結びあり、是なん蓋を仰むけて、簡に冊つけたる形なり、又筒の打合せと、折敷の打合せと、左右の違ひあり、則ち翻したる證なりといふ、

〔下學集下器財〕クギヤウ公卿臺器

〔蓮步色葉集久〕キヤウ供饗

〔書言字考節用集七器財〕クギヤウ供饗臺器也、

〔物類稱呼四器用〕供饗クギヤウ 江戸及び四國にて、けそくといふ、東國にてろくがうと云、西國にてろくごう、又ごうと云、近江にてくげと云、越前にてくぎやうと云、加賀にてをけそくだいと云、
けそくといふ、を今按にろくごうと云は、おくぎやうの訛か、

〔家中竹馬記〕一女房などの中にて、公卿にすはりたる盃を、こなた衆飲時は、盃を手に取て後公卿をそばへをしのけて置て、酒を受る也、我飲たる盃をば、下にをくを、酌する人公卿へ上る也、